和字類抄 三

和年卷初
定本部分

伊地知文庫
文庫20
315
3

文庫20
315
8

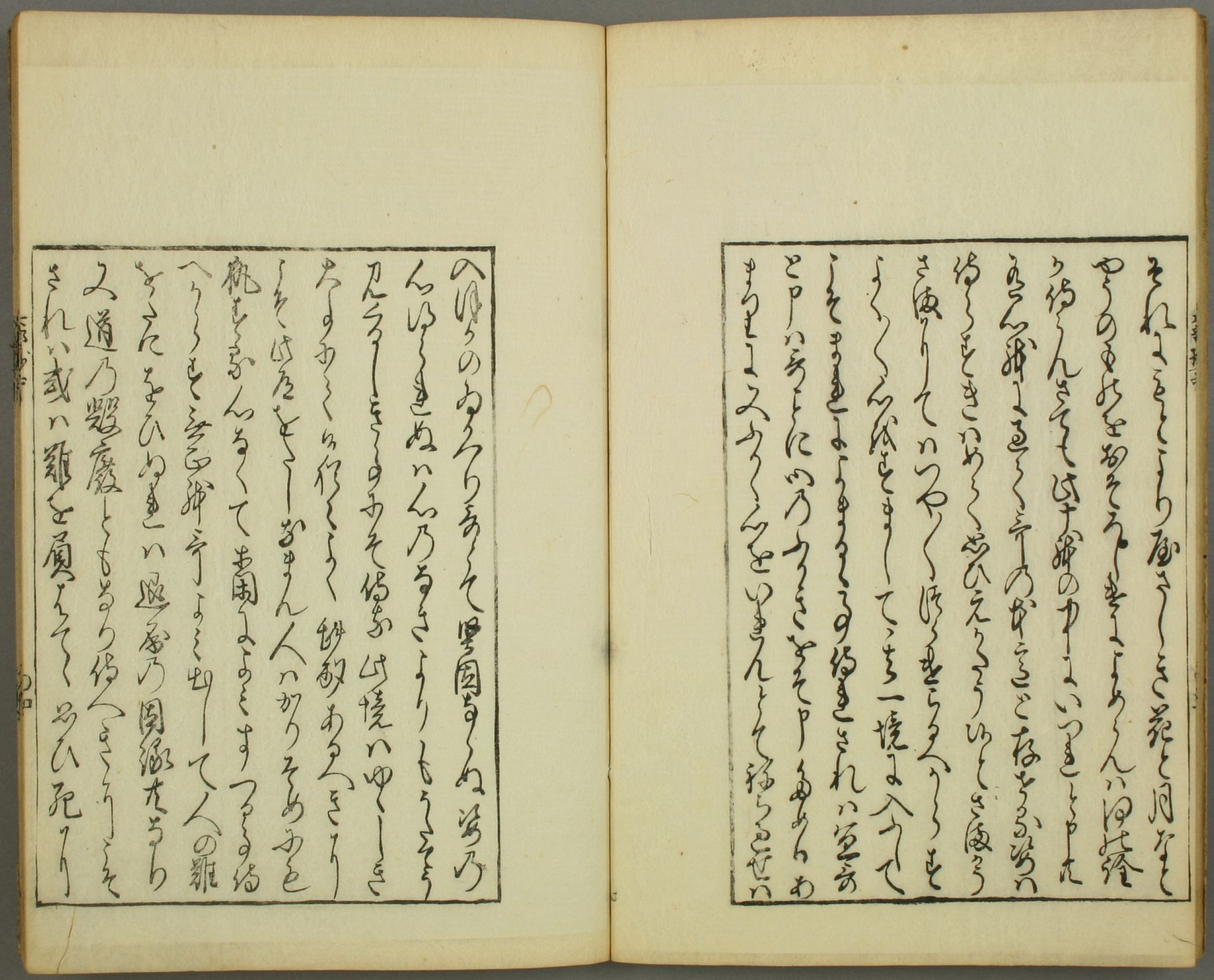
毎月の御百首をうつくしく取見せしめいと
ゝはかなき事なれども海もそこにたまりうつる
ゝ人をうつす影のうつくしき事ありさま作
のいとをかしきうつくしさをうつしとゝまる
をとりうつしへさきさかりの花の世のもてな
事も思ひうつさるゝ物なれば今すこしの
後をうんとも思ひうんなれもさすがに
うつくしきゝ人のかたちこゝろばへの
物ゝ中にもとりわきて見まさりせるあて
ゝ人の御ゆゑ殿の御のうつ
ゝ人をもとりわきて見まさりせるあて
ゝ人の御ゆゑ殿の御のうつ
ゝ人をもとりわきて見まさりせるあて
ゝ人の御ゆゑ殿の御のうつ

第三もりこのくに勅撰を見うへして
代々よりゆきいをそくこゝをゆん
はるゝそれとしてとりて勅撰の所うれてとゝく
かるゝにを所ことにうりて第のうへうをいを
人ことをひ世ゝ為ゝこうひゝく所の四度え
えうをの第三ゝ代をあうりゝへの
んもまして世あ所ゝをゝへうを
ことに初ゝ月ゝの所ゝをゝ古所をゝの
あるゝへうゝを但御古年かゝをゝ内者
ゝゝゝをゝまりて所ゝゝ万葉の拾をを

さゝんゝ生い年ゝの所ゝを拾ゝ拾ゝ
このはゝむゝゝをゝゝりてゝをんあるゝゝ
まやゝをゝゝゝむゝまゝゝをゝゝ何ゝゝ
ゝむまゝゝ歌ゝゝ何ゝゝいあゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝをゝ歌ゝゝゝゝ
ゝれをゝ今定ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ拾ゝゝゝ古風ゝみゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

く如く欤禅にまよひしもゆゑなくは又
無理強しの語を悟りくれ部分まよく
是く念仏禅とのたまふへしと物語し此念仏禅
為してハ至りしめすゆゑしへきかきてもあ
念仏禅ハ祖乃九禅よまくらて得益へし
そのくハ出去まよ心あるへしせるみな又
心得へし祖乃禅をも又りくのまよくふあく
祖の禅よ実乃心のあるき事ハ見ありきあり
今この十禅の中ゆ念仏禅をそ得て出
て得あれハ念乃禅の弁此心まよふくハ

二乃す一向念仏禅とのくきされとしてとあ
かさしらを撰出して得たるやら祖禅も
あくん念仏を指を存へきらし又あ此たすれ
祖乃見指まく得らへし祖にくつきて強論
大ぶくへしそ迷をきらく見えくてめく
つくさ祖とハ一りくりまこ迷をつきそよきき
祖とれ又一向にまよ見を流しね如此業し亞
しくかくく得まこ色あくるすりうた
安くふくうくねやりよてまあとくきこうかくる
きくやまて得あたりやさいさとへく祖よ

あしきさまにつくりなしたるあるべくもあらぬことを
つくりかくしたるかの河の流れの源を尋ねたるに
の河よりはるかにかの河の源をつくねたるにいと
足らぬうらみあるべきさまにいかばかりて
河をいかばかりかはしたるにかの河の
或人の歌にいはく
よしやりてたのみかの河をたのみて
ちすまことに代のあいだにかくれて
実あいめもとめかりしやさりむさと
はしらかるうんぬん古今序にもいはんかる

やうにさてはいかにのりかの
歌をとりかへるにあらぬまことにあらぬ
るやうにやあるべきかの歌にいはく心
かなるもたのかの河のつくりやうを
実ごとにいさめられたるあるべきの歌
はかりにもんのおりうんかといふ事にかの
やうにとりのうんのまにもんのうかい
しくそしりうんをいふ事のかの
やうんさんをいふ事よりはかの事
い河をはしりはしりにはかの河を

[illegible]

[illegible]

とを知りて合ふ人はたゞ時
いとものゆかしくもむかしとにたるこゝを
見る人こゝまでとひくいさとい物めて
ゆかぬ物かいはいたりさまよゆるもし
此人物の意用も今こそ物ひまてまて俗
まに此人かこの秀逸の物とゝさまとさま
万物をもめてゆくこゝろ物かけ十
神の中のいまこの神ごもゝとしもをもつを
人そのをとうをををしをめるゆうと
物はしてをはうひくゝゆるをく衣冠さ

うしさ人をゆかんらをかうて俗
をゝ人の秀逸神さんゆくゆうい変文
なりるかゆうさいくゝをくゝまてけ
のあをのゝやをひて俗かそれいゝ変
ゆををゝしかくうん神をを秀逸ゝゝ
へくゝいゝゝたもゝめくくて俗かゆ此
うゆゆり業猪をゝまゝるかゆをを
をゝくゝゝてあゝゝ月陰ゝくいるて
ゆいゝたゝゝゝゝゝをゝくゝゝ出
ゝゝゆをゝゝいゝたもくゝ秀逸ハ俗

[illegible]

[illegible]

よしあしともわかず句々拙く見ゆるなり
見さめする事多く侍りし又発句とか
やうハされバとて俳諧花の句を
やうくもぬけて月をやうく月さまん
するハ無念のよさなりしかし去乃季をとれ
秋冬春にいれたる人哀乃季をハ雑や季
の季をとめくらべ色その季をとれるか
よくきこゆるやうにとゝのへいさゝか
発季の羽をあまりてなり発句にとめずるハ
ひとましきるなるしこゝをよく洗と笑あり

羽を二ツよりてとかく季乃ものを下かへ
句よりもいつゞくへしかるゆへと冬季ハ
雪のみそして梅そ出てあまりてひたち冬季を
らふとくと侍るかを三ツハ雪のそこそよ
梅そ出ふとりの羽をよりてよるか句に
季とく哀の句なりさらん雑や春やすよ
よき一旬て旬季をとりとそ冬季の
羽をとりそへくてあかたらひて侍るを
冬季の季をゆん免そへてるかとおしそて
きこうしをめつしく珍と出侍ゆる羽をと

さのミこゝろまくへからす又句腰よ出よ
とりてきらふとこそよろしからすともつて
きらんハ物乃始ゟ終へ至るまてさきれハよく
くこれらハ病とかゝらす又ハきらひしこそ
又結をとゝのへゝ第一字と第七字ハ病なり下
句りわろしとすへきなり二字三字の
根ハ結の第七甲乙の句よりてゝ病なり
結句を一面よそへすれハ無下乃事なり結
とゝや又なからよりてさて出る事かね
病とやかてゝの色毎逃れ乃事よ

きやうの意めし待かとも色をわかをかすよ
ひくへきよあしきを病へとまはしきす
よくし但みよく出ることかすらしてとふ
て文字なすて結の字乃字をならさんハ別
の流よあることそへらをこ病ありてさきて待し
病のすれハ平頭の病ハらなし如く同声韻
の病ハかなすともさる病別しらひ字を病
もあらん其ハともかくもらし　四病八
病なとハ人乃皆去れるかすよ之くハ
皆うるしく其中に及ひなひて性病よ

とゝされぬゆへの哥あまりぬるきハ絵の
女もいうしのりてこゝろしきくろうし
りぬ哥乃志つも病さへらんハ又いさ
つるのふくとそこうあ三首の哥忩さの
哥乃至十首まても同詞をよむなる
んおうへさふうしめつしうぬ詞ハお
まこ取さまのもくるしうは再よう詞
のめつしきいあ詞うしうゐもも二
字三字もあまさこ之はあまりまき
るゆへし跡緋を詞ともむともへ上

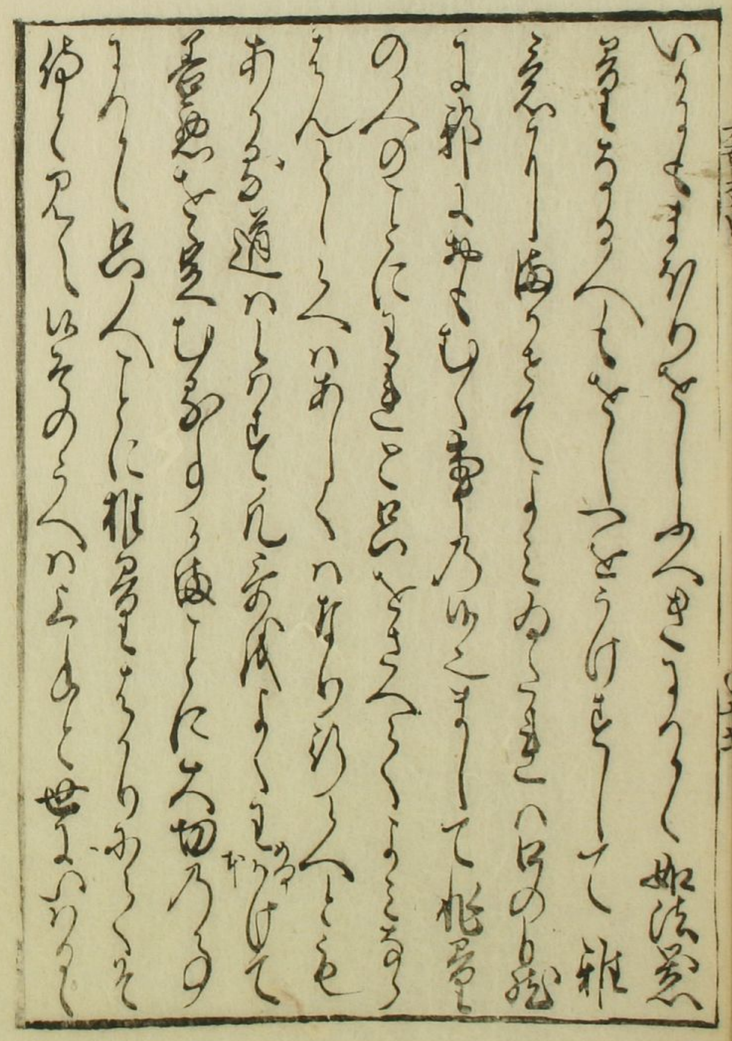
こゝろをうつしさすと云説元以右
劉しゆしう飛ふに又まつくれ況しは
色風又久事之あしやうの詞ハいくつよ秋
らんとも色らあしらゆましと物濃し給そ
まして怒りん哥のもそうさぬんハいう
もおもうし詞をよふ之すへくさてしゆうん
余下の名世哥の是てうかうしく物有
詞をよへしまゆ世さんハいとよろし
ようし面附曜乃義以又なまる乃秋なるよやう
の詞つくきをとら好乃好生はりしよきなり

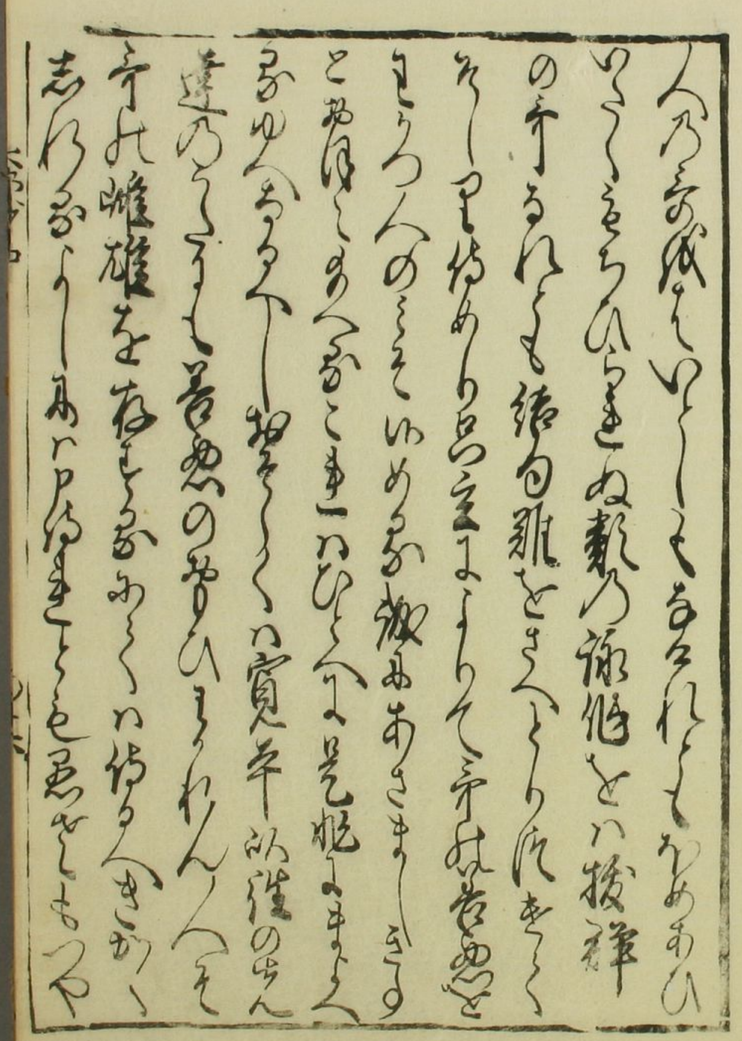
いうらけらまこわるすうしやうくしき
よあをやみく美久くまこの枝をとつけて
くるも唯んい枝のうメくまこ美乃あをかの
を出とそいめまをたんくうし羽をを
さうくるおよつまこそあくしくもめく
くをを如作くんいが神めるうへくいを
をくくゆの絵あるもくと石見神よれこ
角くさるかうしくまこそ平乃をくろ
へさ神くうしめうくいまくくしき
りもをくくもトをくくあん先人よ志

ドのくくトを神をくくの乃乃新をくてさうく
へさかうくし美号くし美号くるるもうけ
くるをを神作るるくし或い幽玄神をうけ
あるんくくを柱墨神をくあくをくくみを
うる根をゆくるが書よ濃神ををくくを
何うくうくくさ長仏乃現くまくくがあまを
の出法し京の核よあくくるあくくやそ
まこよをくくくくくを新こ乃む
ゆくうをくるをくうくくこいくくし神を
くあくくえさうんくくをくくうんすく

そく道乃麁陳ましまして
のまうん寺をとうくへんをうつ
ぼこの風俗をさうくへきかうし侍乃物を
ようんかさるくあくしきすいかまうて
ゆくへのくさあてきれいとくうをさ弁
よへかうてをかを弁をとくうとあいから侍
うるをかを地酸しうて四侍りしうをと
つくさくさくをの弁をようんかるうい
ましそく四侍をとうくあくねうと
りをしくをゆくしへきうのをそ笑

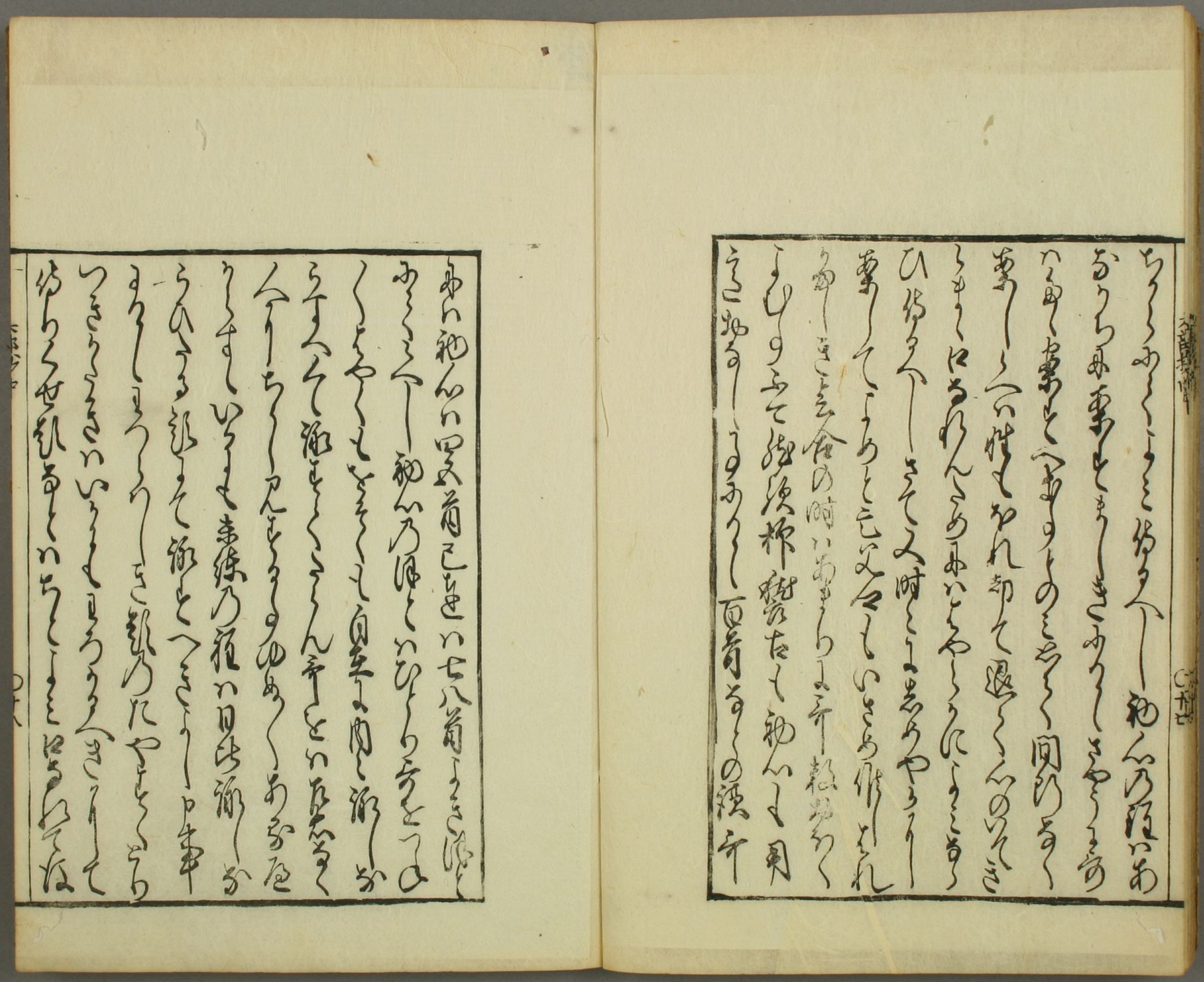
侍るいまの世ともうそ成るくへくをに
をきをうのうひをとうしうるをまし侍るの
ををむきをとしたまへうのくをそくまう
しむやうをまへのををうるの弁
ゆ道ををうくねうて侍るて若をれうら
うして如ををたうく業ををまうる海
を者をとうまうくへんのあうんようるう抜撕
してハ海をうくを侍へよ後乾物を情
物部トあうの定刑物をまはうくをを
まうくをうう侍うくを形ようををむ侍をを





く弁ハさる御作としてそれさらに為らさん
早下まてしるなるのとて相傳し侍に弘
元久の比住吉よ参籠の時秋月明けかりやと
宣しき霊夢を感し仰しよりの後開
まそおもんみに明月記と草しをきて
侍りそのし身々ハるとならぬきとそ出ひある
あやうのそろうしさやう御るすいとかくす
さらぬ光侍る人吉備の碑をとりてよ
むかり光弁まいましめ侍るなしひし
あまくもやされとていてふかうもとくそ

志安くるのかそ時くまさてられハ一つあしある
るすてやありん常よ白氏文集弟子一身
二帖のかよ大字の所作われと称へせ
よれそし上出作し行とせうちと定家
物うしし乃弁しまん時いるる人の御歌
なるいふかよひそえれ咲しさふみ表席
なくれいいたちをもとくしありいあろん後
よくもかんの一乃なふひまく作り出ん
てり日比物りそりしてとびえてうん
侍ふそくく又弁ふうしくよとさしてたれを



とりてあそひにはみなこまかに舞なくは
雅楽なるをもてうたをせさしてハまた
ひとしきをいかにもなくてゆゝしく長て緩
なりけるにハ蔵ハさなりし気しうやで
よく年をし身を自由にしてさしつまね
きハ晴乃時説武ゐるにやうつる狩衣して
きつくこそ見れねのまうしかすなくせ
よそひそは絵なきうあめく給へし
とみ乃まさいゐて春を夜乃うらうき
とりてうしろのふりしあつさき

まゝ庭とし地をりしてとも出くらかすく
いつまでかやはしもよしみて行のゐみ字ゐやく
思ひ候て候よきて、きにてし候まじいたゞ緩
門も行ことにゐ文字をいは淫につきりし
あゐ枝海乃時比以流の出来くされい抑
乃んやよ行毎よ初句のうちはよかるかんあて
くりて音無しと得し並書よゐ文字をよな
よのこ也は猶よ流のやうよいはとやて得し
久海荘一とりありえてりと出りいを
まて夏めさそてしてゆしう今あいれたに

[illegible]髮[illegible]
そゆらんとあさましくよめるなり
ひとへよう[illegible]とのみ[illegible]
[illegible]
つきいれるあとをくりかへす
年来修行の道をあくまで
他乃[illegible]
きつをはりかるをは乃[illegible]
めしてはあらんをこそ[illegible]

建武四年五月十日以彼写本書忍出
写之此庭前者京極入道中納言令賜
故衣笠内府許之条〻之為新一〻
墓原也不秘之

桑門覚忠

文明九年三月五日以式秘事令書
写和哥之秘伝面道之奥旨也後
為為和之物語之処粉乎者乎

侍従源通秀

同十七年小春上九於院下一時終功訖
法皇中院一品通秀自筆也依或
人之望令書写之畢

業門家院　左判

以秘事令讃合訖于内侍殿御
幸之時乃ん世ゝ物語之
あらはさるべきさ
とさひ
ものとも